

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編 ①9 田宮治

緊急避難的完勝法

「おっ、この靴跡はまきれもなく北嶋だ。凄いで北嶋！」

反対側の国道から私たちを追ってわずか二十分くらいでここまでぶっ飛んで来た北嶋氏に驚いた。これが若さのなせる技であり、若者の成長なのだ感心した。

「よしよし、上出来だ。これでいい」と、ほっとして八合目辺りにあった大木の根元にどっかりと座り込んだ。

「私の役目はここまでだ」と流れる汗をタオルで拭い、ボトルの水をガブ飲みしながら眼下に広がる景色を眺めていた。そして、犬たちの鳴き声を推し量り、「もう大丈夫だ、北嶋！ さあ、ここから自分の力でやり遂げてみる！」と見守ることにした。

犬たちははるか下に広がる大杉林の一番下の小川辺りで猪を止め切り、ワンワン、キャンキャンの完全な止め状態である。猪も負けじとグッグッ、グオーッグオーッと猛反撃の恐しい激戦となっている。大杉林から沸き上がって来る犬たちと大猪の攻防音が、山々に響いて山全体がどよめき渡り大騒ぎとなっている。

私はすべてを北嶋氏に任せ、高みの見物と洒落込んでいたが、あまりの騒ぎにヤキモキしていた。「焦るな！ あと十分もすれば必ず彼が決めるだろうよ」と思いながら、立ち木やつる草に纏まりながらゆっくりと止め現場に向かって進んだ。

急に心細くなり、GPSで確認しながら「北嶋さん、まだかいな」と大杉林の中にある小峰に立って待っていると、何と止め切ってい

た猪が突然突っ走ったようだ。

犬群の急を告げる凄いい鳴きが大杉林の下にある小川を渡り、四、五〇〇先の谷間に広がる田んぼを突き抜け、あっという間に向こうの山に飛び込んでしまった。

「何ということだ。これは尋常ではない。やっぱりこれは歴戦の兵だ。マロ号たちの止め芸をもつてしても止め切れないとは何という強さだ。これは簡単ではないぞ」と、私は手にしていたGPSを無線機に持ち変えて「一番です。二番さんどうぞ！ どうなりましたか？」と尋ねると、「あと少しだった逃げられた。このまま追い続けます」と悔しそうである。

私は思い切り元気づけてやりたくて、「こうなったらマロ号たちは絶対逃がさない。必ずまた止め

切るが、大物だからくれぐれも注意してくれ。ここからはお前が親方（勢子長）だから、犬たちと猪の状況をよく見た上で注意しながらタツと連絡し合って猪と戦ってくれ！ 焦らずに頑張るのだぞ！」とやっぱり指示していた。

それでも北嶋氏は元氣そのもので、「了解、了解！ 先に行きます」と、もう向こう側の大山を必死でよじ登っているようで荒い息づかいである。

私にはもう北嶋氏に教えることは何もないと思っていたが、想定外のガリの出現によって急に心配になり、「待ってるろ！ そこで……」と、彼を待たせて一緒に猪を攻めるべきだったかな？とも思った。

しかし、よく考えてみると北嶋氏はもう一人立ちの時であり、こんなガリとの戦いだって、いずれは親方として一人で立ち向かわなければならぬ時がくる。だから、自力で戦わせてやるのも最後の親心であると心に決め、「焦らず、落ち着いて、頼むぞ！」とエールを送った。そして「俺もすぐ

追って行くからな……」と付け加えていた。

私はこの戦いで一番必要となる相手（猪）をきちっと確認しておきたくて大杉林を飛び下りて、さっきまでヨシ号たちが必死で戦っていた止め現場の様子をつぶさに点検した。その結果、猪の凄さを戦いの場で感知して、ここからの戦い方を改めて検討せざるを得なくなった。

このガリが相手では、今までの戦いで教えてきた戦術は全く通用しない。勝ちに繋げるためには、寸前ところで逃げられた攻防現場を納得できるまで十分に検証することが必要である。

この現場で分かった重要なことは、猪が一流犬群にこれだけ攻め込まれても絶体絶命の谷底には落とされずに、一步手前の大杉林で踏み止まり、猪有利の状況で戦っていた点である。つまり、猪は獵人が近づいて危ないと思えば、いつでも逃げ出せる余裕を残して自ら選んだ所に止まっていたのである。

私はこの年になるまで、このよ

うなグレ猪やガリ相手に何度となく激戦を重ねてきたが、猪の常識がまかり通るほど生易しい世界ではない。そんな悪戦苦闘の末に編み出した俺流の作戦が唯一使える戦術であるが、それは何百頭も猪を撃ち獲った絶対の自信をもとに成り立っている戦術であり、緊急避難的の時にいつも使う完勝法なのである。

この二年間で教えてきた猪の常識は、いかなる実戦の場であっても安全のためには止め現場での猪への寄り付きは必ず山の上からであった。しかし、上から寄り付いた場合、必ず逃げられてしまうのが今回のグレ猪やガリ相手の時なのである。

私が緊急避難的完勝法と言ったのは、グレ猪やガリ相手の時に絶対勝つためには止め現場の真下から猪に寄り付くことなのである。

当然、この戦法は危険が付きまとうので実戦の場で何度も猪と向き合い、飛び下りて来る猪を撃つてみることである。

同時に攻め込む方向では、時計の十二時の方向から攻め込むのを

基本に、左回りで（右回りも同じである）、十一時、九時、七時、六時の方向まで順次難度を上げていき、時間をかけて挑戦するのである。そして絶対に安心して猪を迎え撃てるまで腕を研ぎ、度胸をつけることである。

一見すれば恐ろしい危険な真下からの寄り付きも、実戦で鍛え上げて覚えてしまえば、レールに乗って下りて来る猪を迎え撃つだけの至って簡単なものである。

特に私のように高齢になって山登りが大変になった時、わざわざ山を登って猪を上から下に攻めるよりは、山鳥を撃つ感覚で下から上に攻め登り、的（猪）を絞って迎え撃つのは山鳥撃ちより簡単でなかなか乙なものである。それにスリル満点で、面白い上に非常に楽チンな究極の決め技である。

ガリの正体

ところで、猪犬による猪猟ではグレ猪やガリ対策が特に重要である。逃がして当たり前の初級編から、必ず撃ち獲る上級編に到達す

るまでの猪猟の流れを、実戦で熟知した上で自らを鍛え上げることである。

基本的には未熟な若犬群が猪を発見して吠え込んだ場合、猪は例外なく山の頂きを目指して登って来る。逆に止め芸が一流になっている犬群に吠え付かれた場合、猪は必ず攻め捲られて山の下のへと追いつき落とされるので、間違っても山の上には登って来ない。

ここで大事なことは、犬たちの実力の差によって猪がとる行動をいち早く見抜き、若犬が鳴き出したら、その上のほうで静かに膝を折り、その場で登って来る猪を迎え撃つて若犬の前に転がし落とせばよい。

猪止め犬による猪猟は、猪を止めてくれないことには勝負にならないので、山全体をよく見て猪の寝屋を特定した上で、大峰筋や山の七合目か八合目辺りの猪道に乗って狩り進むことである。このようにいつも犬たちが鳴き出す上のほうにいれば、「いざ猪だ！」という時に飛び下りるだけなので、攻めやすく安全に確実に撃ち獲れる

のである。

若犬の場合、その場で待って登って来る猪を三、四頭も撃って転がし落として咬ませてやれば、若犬はたちまち急成長して止め芸だけでなく追い芸までも仕上げられるのである。

また一流猪犬の場合、基本的に犬群の鳴き声を目掛けて一気に飛び下り、できる限り近くまで寄り付いて確実に一発で決めることで

ある。特に一流犬群が鳴き出した時が肝心で、必ず上から攻めなければならぬ。こう言い続けてきたのは、山で出くわす猪は千差万別で、攻め方を犬群の鳴き声によつて的確に判断し、その時々に合わせて戦わなければならないからである。少しさらになが身も危険に晒すことになるので、激戦の中にあつても十分に注意してどこまでも安全・安

心で、必ず上から攻めなければならぬ。

こう言い続けてきたのは、山で

いた。

いつまでも元気に猪猟を楽しむために、山で出くわす危険で恐ろしい厄介なガリ対策が重要となる。その攻め方や撃ち方はもちろんのこと、犬芸に至るまで十分に研究して繰り返しの鍛錬によつて、いつでも完勝できるようにし

ておくべきである。ところで、ガリについてであるが、一流猪犬群が戦いの中で大ケガをしたり、いるはずのないと思つた猟場で、大猪が突然飛び出したりして、想定外の悪さを仕掛けて来るのは、まぎれもなくガリの類いの仕業である。

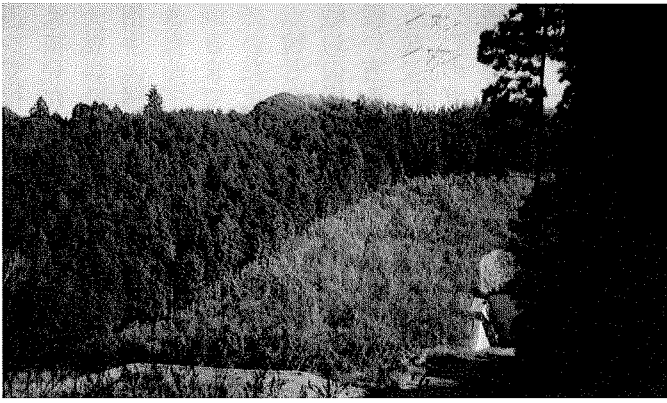
その難敵「ガリとは何ぞや？」であるが、このことを正しく知ることが猪猟の危険や恐ろしさを克服して無事に完勝し楽しく成し遂げる上で重要なことなのである。

ガリの正体とは、交尾期(十二月〜三月頃)になるとメス猪を追っかけて山々を駆け巡り、長い間餌もとらず、その上、オス猪同士がメス猪の奪い合いで闘争して勝ち残った全身牙傷(深さ一〜二センチ、長さ一〇センチ)だらけの歴戦の兵である。

でも間違えば犬たちの命を失い、さらになが身も危険に晒すことになるので、激戦の中にあつても十分に注意してどこまでも安全・安

心で、必ず上から攻めなければならぬ。こう言い続けてきたのは、山で出くわす猪は千差万別で、攻め方を犬群の鳴き声によつて的確に判断し、その時々に合わせて戦わなければならないからである。少しさらになが身も危険に晒すことになるので、激戦の中にあつても十分に注意してどこまでも安全・安

心で、必ず上から攻めなければならぬ。こう言い続けてきたのは、山で出くわす猪は千差万別で、攻め方を犬群の鳴き声によつて的確に判断し、その時々に合わせて戦わなければならないからである。少しさらになが身も危険に晒すことになるので、激戦の中にあつても十分に注意してどこまでも安全・安



カツ号、パイ号、武蔵号、千代号のお手柄。この4頭ならば、たとえガリでも力でねじ伏せる。これはガリではないが、猪は全く動けない状態になっていた。1mの刺し撃ちで仕留める

千葉の猟場は、竹の大藪でなければ大杉林が続いている。この中をどこまでも猪を追うことになるが、それは異様に猪を獲り過ぎて少なくなっているからである。一年中、どの猟場でも異がある。

このガリの名の由来は、交尾期に縄張りを守り何頭ものメス猪と交尾して、本来なら一三〇キくらゐの大猪が二、三〇キも痩せ細り、身軽になって強い猛猪と変身したガリガリに瘦せた猪という意味である。



ヨシ号、マロ号、シロ号の止め現場。いつものことながら、泥だらけのスズ濡れの止め現場である。谷川に落とし、猪を動けなくする見事なものである

したがって、こんなガリを苦勞して撃ち獲ったとしても、それは大物とは名ばかりで肉質は悪く、おまけに交尾期特有の臭いが強いので、楽しみの分け前までも誰も欲しがらないという始末である。新人たちでさえ喜ばないこんな猪肉でも、私は犬たちのために「そ

れじゃ俺が全部持ち帰る」と言っ
て大切に持ち帰っている。猪肉は
猪犬にとってこの上なく犬芸を進
歩させるのである。
ここで問題になることは、撃ち
獲っても喜ばないめっぽう強いガ
リに危険を冒してまでなぜ戦いを
挑まねばならないのか、というこ

とである。この答えこそ、私がこの一戦で押し出して分かってきただきたい猪猟の極致であり、重要な意義なのである。
新人ならともかく、親方や勢子長であれば、ガリと必ず対戦してしっかり覚えておかねばならないことである。ガリ相手に戦ってみて、その恐ろしさや強さが初めて分かるのであり、猪猟の極致もまた、ガリとの戦いが教え導いてくれるものである。
そんな大事な教材が今戦いの真っ只中にあるこのガリなのである。当然、ガリは山に残しておけば子孫を残し続ける大事な種牡であり、百戦錬磨の猛猪であるから、並の犬芸や猪猟技術で太刀打ちできるものではない。ましてや畏などにもやすやすと掛かるわけがない。

極致を掴み取れるのである。
私は、わが猪猟人生の意地とプライドをかけてこのガリと全力で戦って、どんな至難の戦いでも、このように戦えば必ず完勝できるということをも、実戦をもって証明したいと決心したのである。
幸いにも今日の戦いの最中にあるのは想定外のガリであり、願ってもない教材なのである。この最高の教材との大一番に自らの猪猟魂と英知を結集し、絶対の自信を持って俺流で攻めまくり、堂々と難敵を撃ち倒す雄姿を見せたいのである。そして、激戦を乗り越えて難敵に打ち勝つことで知る、大事な猪猟の頂点到達の道筋や猪犬完成の手法までも何とか証明して分かってほしいのである。
猪猟を続けていけば必ずどこかでぶち当たるガリとの対決であるが、それは恐れるなかれ悔るなかれで、今までくどいほど説明してきた訳も必勝法の重要点も、願いはただ一つである。そして、宿敵ガリとの難敵を無事に乗り越えて堂々と猪猟の未来の夢を描いてもらいたいのである。(つづく)